

## 葉集を読む

松岡 隆子

花種をつつみし妣のさくら紙

鈴木 富代

〈妣のさくら紙〉に惹かれたが、実はさくら紙をよく知らない。日本大百科全書を見ると、和紙の故紙を漉き返して再製した薄い紙のことで、楮を原料とした薄い美しい吉野紙にあやかつて桜紙というところがあった。

丁寧に畳まれた小さなさくら紙の包みを振るとかさかさとは花種の音がする。毎年花が終わると種を採り、さくら紙に包み、小机の引き出しに仕舞っていた母の姿を想いながら、鈴木さんは今その包みを開いている。彼岸が近い。そろそろ花種の蒔き時のようだ。

春満月手足つめたく見てをりぬ

岡 美穂

同じ春の月でも早春の頃と春爛漫の頃では趣きが異なる。二月の春寒の頃の月は冴え冴えとして美しい。一点の翳りもない満月の美しさに心を奪われ、手足の冷えも忘れて何時までも佇んでいた岡さんの姿が思われる。感動のあまり言葉を

失うところだが、岡さんはわが身の手足の冷えを言うことで満月の美しさを印象づけた。春満月と一体となって得られた一句といえよう。

啓蟄の土をこぼせるシヨベルカー

加々美敦子

この句の決め手は〈啓蟄の土〉である。和らいだ日差しに大地も温もり、冬眠していた地虫が穴を出てくる啓蟄の頃の土。シヨベルカーが掬い上げた土には穴を出たばかりの蟻などが混じっているかもしれない。黒々とした柔らかな土は春の匂いがある。シヨベルカーという硬質なモノと啓蟄の土との取り合せが絶妙であり、躍動的な春の始まりを感じさせられる。

自治会の奉仕にふたつ桜餅

河本 順

自治会の奉仕というと、町内の清掃や公園の草取りなどが考えられる。地域の環境美化のために互いに協力し合うなかで自ずと親睦も深まっていく。「ご苦労さま」と配られたのが桜餅二つと聞くと、その奉仕活動は桜の季節だったことが分かる。俳句に詠もうとすると散漫になりかねない事柄を、極力言葉を省略することによって詠みきっている。自治会の奉仕と桜餅を繋いでいる助詞の「に」の働きは大きい。何よりも桜餅に詩を感じたことが一句を成した要因といえる。

二の午の祝詞は雨に消されさう

山下なつ子